

令和4年春季号 (Vol.87)



- 空手とは (P3)
- 手の内の圧から始まる (P4)
- 昇段・Dan grading (P6)
- 技を受け継ぐ為に (P7)
- マンネリ (P8)
- 旅紀行 (遠見山公園、栃光、宮地岳かかし、広住身神社.....)



力必達

ロシア軍がウクライナに侵攻し戦争状態が続いています。

この出来事により今後の世界情勢に大きな変化が起こる可能性の予測が出てきている状況の中で、棍を振りながら重装備と精密兵器 (+AI) で編制された軍隊同士の近代戦と私が稽古する空手との小さなつながりについて考えてみました。

私は少年自衛隊卒なので軍事にはとても興味がある。特に、対野戦砲レーダー部隊に所属したこともありマイクロ波レーダーやレーザー電磁気兵器の装備や戦闘部隊の能力の進化に注目しています。



— 冬季演習 (北海道島松 1970) —

とは言え、国益を守るための「国防」という大事を他国に依存し、また、戦争の有事を想定した時、我々一般国民がそれにどのように対処するかの思考能力さえも忘却の彼方へ追いやっているのが日本国の現在の状況です。私はこの残念な姿に、何とも言えない

もどかしさと悔しさを認識し自覚していることは云うまでもありません。

私はその憂さ晴らしということではありませんが、稽古においては引き金 (トリガー) を引く感覚を保つためのコーサー突き、銃剣格闘の基本打突、各種古武器の相対打ちを行い、少しでも実戦の感覚を持ち続けるように心がけています。

もちろんこれには、真剣で稽古される天真正自源流刀法の影響が色濃く反映されています。

そして又、私に空手を指導してくれた剛柔流の松下さんが「無手 (徒手空拳) で武器を持った相手に立ち向かうな…必ず何か (得物) を持って相対しなさい…」と話してくれた言葉が、今でも稽古の根底にあるのです。

さて、銃の保持を憲法で認められている国とは違い、日本は一朝有事 (戦争・紛争) があっても対敵に抵抗するための一切の火器を私達一般国民が持つことができない法律になっています。そうなる、もし国内での市街戦になった場合、戦う武器を持たなければ、その意味するのは、極論ですが“坐して死を待て”と口外しても過言ではないということになります。

この世界は弱肉強食の動物界と同様に非情で、強者が弱者をあっという間に飲み込み抹殺してしまいます。現在、中央アジアや東アジアで起こっている事実はそれを物語っています。

そんな厳しい現実を前にして、今の平和ボケ日本は「対岸の火事」あるいは「見ざる・聞かざる、言わざる」を想起させる腰が引けた政治姿勢あるいは偏向した社会主義に向かわせようとする情報操作が見え隠れしています。

一部の保守的な識者からはそのような状況を俯瞰して、“このままでは我が国は滅びる！！戦前の

ように強い日本を取り戻さなければいけない……”と述べています。

武士道の心

近現代史を見て思うことは、我が父や祖父そして曾祖父の時代、高い道德観と質実剛健を持ち合わせた日本人の素晴らしさです。

そして更には、海外諸国では今なお日本軍の勇猛果敢な強さや品格の高さを、具体的な事例や戦闘状況などを紹介し語り継がれていることへの、大きな誇りと感謝なのです。

その日本軍の精強さの背景には何があったのか考えてみます。

一言で要約すれば……；

武士道の心が引き継がれ、軍全体が武道の鍛錬に余念がなかったからこそだと確信しています。

手前味噌になりますが、その精神は現在も健在です。

しかしながら、大東亜戦争では負け戦となり多くの有能な国民や軍の兵士が散華されました。

その裏には、国内外に存在した隠れた共産主義者の陰湿な謀略を読み切れなかった軍上層部や一部の政治家の誤った判断と決断があり、その結果として多大な悲劇を生んでしまったわけです。

軍隊には上からの命令下達（上意下達）に従わなければならない厳格な規律があります。

一朝有事となれば兵士はその命令一つで生と死が交錯する前線に向かわなければなりません。

慰めの言葉には遠いですが、私は、大東亜戦争において、多くの兵士が“何故戦わなければならないのか？”、その大なり小なりの大義名分を納得して戦場に赴いたと信じます。

私は武の修業とその道の探求を続けている一介の空手家ですが、日本国民の一人として日本武道の一翼を担っているとの自負と誇りがあります。

現在は平時から有事へと事態が進んでいます。ここで空手（武道）を修業する私達は、技の追究をしながらも世相を読む事に努め、専制政治から振りまわされることの無いように、それなりの言論の武装をも行いながら有事に備えなければならないと思います。

現在の兵器は、私が在隊していた頃より性能が上がりハイテク化しています。しかし、それを知りながらも、クラシック（古典的・classic）でアナログ（analog）の稽古をしながら、飛び道具（小銃）の訓練も時々したいと思うこの頃です。老兵ですがまだまだ意気軒昂です。（坂本）



【旅紀行】 熊本県牛深市の遠見山（標高 217.2m）の山頂一帯にある公園、「遠見山公園」。

ここからは天草灘や牛深市街などの大パノラマを一望でき、夕日の鑑賞スポットとしても人気です。

園内には水源地跡の池を中心とした回遊式の日本庭園のほか、アスレチック広場や多目的広場、テニスコート、ゲートボール場などがあり、休日には多くの市民が訪れる“憩いの場”となっています。

花の名所としても知られ、春には桜やクンシラン、初夏はしょうぶ、秋は紅葉、冬は水仙など、四季折々の花に彩られる。

その中でも水仙は、1月～4月上旬にかけて約 20 品種 45 万株が次々に見頃を迎えます。（福田 脩）

空手とは

埼玉越谷道場 師範 山内 博

先日、歩いていると、小学生の集団が目の前を通り過ぎて行きました。低学年位の子供達を何気なく見ていると、一人の子供がきれいな円を描いて側転をしました。

“アッ、この子、体操を習っているな”と思った時、その子はそのまま軽いステップを踏みながら走り去って行きました。私は“体操ではなくヒップホップを習っているのかな？うまいものだな…”と思いつつも、身体が自然にリズムと共に動き出してしまった姿に感心してしまいました。

そしてその時、ふと、空手を習っている子で、今の子のように、無意識に空手の動作を突然に始める子は、まずいないだろうなと思いました。なぜだろう？

私はヒップホップを習った事が無いのであくまで想像になりますが、おそらく、音楽に合わせ、あるいはリズムを刻みながら鏡の前で練習するの



だろうなと思います。

“それは、どう云う事か。”

リズム、メロディとは、身体の中から湧きあがるものだと思います。それに対して、ダンス自体は体の動作であり、内のメロディと外の動作を、鏡を使ってつなぎ合わせているのだと思います。それでは、空手は・・・？

そこで、はっきりと気付きました。

坂本先生の空手には、リズム、メロディがあり、その上での‘動作’だと云う事に…。私のやっている事は、‘動作’だけだと云う事です。

埼玉三郷での稽古時代に、先生が、「手先ではない、腹からのうねりだ。ウェーブだ。」と云っていたのは、この事では、と思います。何気ない日常は真実でみちていると思った出来事でした。

さて、この様なことをつらつらと考えていて現代では空手と云えば格闘技、あるいは、スポーツ競技と、強さを極めるための手段の一つと、大多数の人に思われていることでしょう。

しかし、空手が生まれた琉球時代を、翁先生の逸話を通して想像して見ると、三線や、琉球舞踊、そして空手が生活の中に混ざりあった文化の厚みを感じます。それは、「舞と武」が、混じり合っているとも云えるでしょう。

ですが現代では、空手、三線、エイサーなど、それぞれが分かれてしまい、お金を払って習うものになっています。これは、便利(?)ではあるけれども、その現状は果たして文化と云えるのでしょうか？

現代の空手は格闘に特化したものが主流になっています。しかし、我々の龍精空手は「空手は文化です」、とでも云わなければ説明しきれない奥行きがあります。

今、この文章を書いている、新ためて「力必達・つとむれば・・・」、これは、大変なことだぞ、と身が引き締められました。

生きていくためには、身を守るため、家族を守るため、或いは、この世のことわりを守るために強さが必要です。

空手は武道であり、強さを探求する事は避けては通れません。

しかし、もし、強さだけを追い求めるのであれば、なにも、空手を練習しなくてもいいのです。それこそ、ただ強いだけの人は、いくらでもいるのです。

私が龍精空手の練習を通して感じる事は、先達の好奇心に満ちた想いです。

「形」を演じるたびに、“なぜ…なぜ…”という問いかけが聞こえてきます。それは、遠く過ぎ去ってしまったと思っていた過去が、今と繋がっているという事実を教えてくれている事なのです。

私にはまだ、「空手は文化です」と答えるだけのものは何もありませんが、少しでも多く、先達が見ていた景色を見たいと思っています。

手の内の圧から始まる

宗運道場 4段師範代 甲斐 隆

「手の内」とは、「極意」「秘伝」など大事なことを示す言葉とあります。

弓道では弓を、剣道では竹刀を扱う上で必ず習得すべき手の使い方です。日常生活でも、最初から拳を握るのではなく小指・薬指を、つけ根から折りたたむように意識して手を握れば、肩の力みがとれて、楽に力を発揮できるという。丹田に力を入れ、脇をしめて肩の力を抜く「上虚下実」と言われる極意を、指の使い方からも学ぶ必要があります。そこから、武器、竹刀をもたず行う「から素振り」や、タオルを使って肩回しなどを行ったりして動きを確認する事も大事となります。

古武術に学ぶ身体の使い方



— 腕の可動域を広げる「手のカタチ」 —

柔術は手を掴まれたところから始まる技が多いです。

この掴まれている部分から相手の力の強さ、方向、重心位置などの情報を得ているわけですが、相手にとってこの接触部位から自分の情報が伝わってしまいます。

なので、掴まれている手の内で力のかかる方向があちこちに動いてしまうと相手はそれに即座に反応します。

この圧の方向の変化というのは思った以上に敏感に反応されてしまいます。

両手を掴んでもらった状態で、片手を引っ張って相手を崩してみます。

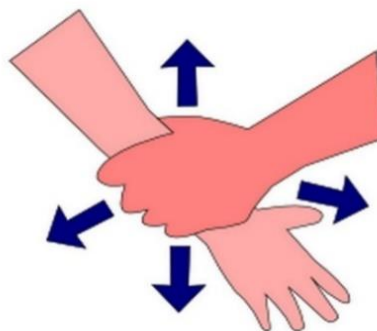
何も考えずこの状態から引っ張ると相手の小指側に急激に圧が加わり、相手はその変化に反応してこちらの動きを止めてしまいます。

そこで今度は掴まれた状態で最初から小指側にほんの少し圧をかけておきます。

この状態から先ほどと同じ様に引っ張ると今度は相手が崩れやすくなります。

最初の圧のかけ方でも色々と条件は変わりますが、ポイントは手の内の圧が最初から最後まで同じ方向

手の内で圧の方向があちこちに变化すると相手に動きが悟られてしまう



へ向かう様にするということです。

この方向が少しでも擦れたり、あるいは、力任せに持って行こうとすると、相手はその変化に応じて返し技を掛け、結果としてその技を食らうこととなります。

相手に対する手の内の圧

次に最初に加える圧は段々小さくしていき、出来れば相手が圧を加えられた事が判らないほどに動きを小さくしていけたらベストです。力任せに押ししたり引っ張りした時点で技としてはアウトです。



うまく同方向に圧を加え続けられると相手は技の変化が捉えられなくなり崩されます。

面白いと思うのは相手が感覚的に圧を意

識してなくても、必ずその圧に対する反応を感じられそれをコントロールするかの様に自分の好きな方向に崩すことが出来る様になるといところです。

これは、技の連続性(伝達性)がしっかり練られていなければ出来ないということです。

玄人好み

今回の大相撲大阪場所でも眼を見張る対戦がありました。



— 豪快な吊り落としの技 —

若隆景と大栄翔戦に大技が飛び出しました。玄人好みの技であるとの解説でした。大栄翔の猛攻の押しを土俵際で残した若隆景が大栄翔を横向きにしてつりあげてそのまま投げ捨て（写真）た一戦です。重心移動の伝達を手伝って繰り出した技と言えるかと思います。もちろん腕力で押すのではなく重心移動のエネルギーを相手に対してまっすぐ押すだけでは単純に

相手と力がぶつからないように
下からすりあげるように押す



相手と力の衝突が起きてしまいます。ですが、やや下方向から斜め上にすり上げる様に肘が脇にくっついた感じで相手を押していると相手の重心は浮き上がり動かさず。

日頃の稽古により力の伝達性がしっかり練られているからこそその醍醐味でもあります。

これからも柔法の持つ意味合いに感心を膨らませながら、更に磨きをかけていける様稽古に励んで参ります。

天草が産んだ初の大関 栃光正之（本名は中村有雄）



— 本渡諏訪神社（左写真）境内にある銅像 —

昭和8年、牛深市深海町下平に出生。幼時より怪童ぶりを発揮。青年時代は宮相撲で頭角をあらわし、19歳で志を立てて春日野部屋に入門。天草人特有の素直さと、人一倍の稽古熱心により、昭和30年春場所15戦全勝で十両優勝。僅か3年で入幕。努力と忍耐をモットーに昭和37年5月、大関の栄位に昇進。本格的な押し相撲と一度も「待った」をしなかった堂々の立合いは、力士の亀鑑と仰がれ、名大関とたたえられました。大関在位23場所、輝かしい成績を残し、昭和41年初場所後引退。検査役、参与として相撲界に貢献中、昭和52年3月28日、43歳の若さで不帰の客となりました。（福田 脩）

昇段 (令和四年度 冬期) / Dan Grading (2022 Winter time)

<Grey-Bruce, Canada>

四段師範代
【Yo-dan Shihandai】



Evan Bray
エヴァン ブレイ

二段準指導員
【Ni-dan Jun-Shidojin】

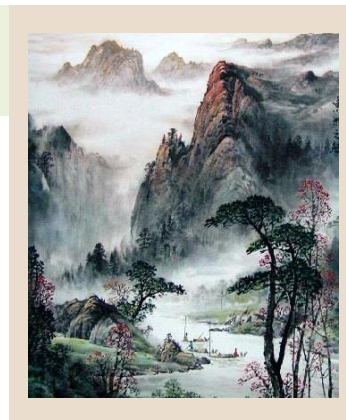


Dustin Barfoot
ダスティン バーフォード

初段 【Sho dan】



Samantha Stroeder
サマンサ ストロエダー



<Australia>

二段準指導員 【Ni-dan Jun-Shidojin】



Jonah Haines
ジョナ ヘインズ



Jason Lyons
ジェイソン ライアンズ



Zachary Flick
ザックリイ フリック



Rylan Thompson
ライアン トンプソン

初段 【Sho dan】

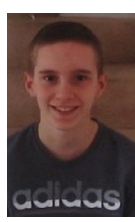
【初段 Sho dan】



Ella Hird
エラ ハード



Louise Henderson
ルイース ヘンダーソン



Caerwyn Berry
セイレン ベリイ



Cator Hunt
ケイター ハント



Rebecca Hunt
レベッカ ハント

【初段 Sho dan】



Timothy Anderson
ティムシイ アンダーソン



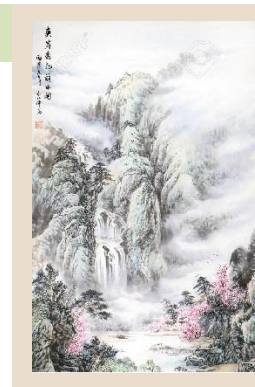
James Diaz
ジェイムズ ディーアーズ



Abbey Hoult
アービー ホウルト



Bryden Mungcal
ブライデン マンコル



技を受け継ぐ為に

宗運道場 四段指導員 福田 脩

真理というものは、核心部分は変わりませんが、表層的な部分は時代に応じて微妙に変化するものです。逆に言えば核心があるからこそ表現が自由に出来るのであって、核心を理解していなければ表現はできません。これが、核心を理解していないで表面ばかりを見てしまっていると全員が全く同じポーズをとってしまいます。

今の競技空手がまさにそうですね。
人それぞれ身体づくりは違います。ですから、見た目が全く同じになることは無いはずなのですが、核心を理解していないと何処を見ればいいのかもわかっていない為、表面的な所だけを見てちょっとでも違えば、駄目だのあるいは創作するなどの言ってくるわけです。
それでは話にもなりません。まさに技の形骸化です。

人は物を見た時、それを一回頭の中に取り込んで、自分の経験や価値観、考えを加えて再構成して物を見ています。ピカソは遠近法に疑問を持ち、1視点から見た遠近法ではなく、多視点でとらえたものを再構成するという、自分なりの答えにたどり着いたといわれます。
なので、そこが経験ではなく自分の考えだけで再構成した場合、見た目は同じでも再現されておらず、まったくの別物になってしまうのです。
ただ見ただけでは再現できないのが武術です。
見た目柔らかくて全く威力がなさそうに見えて、実際は物凄く威力があるのが古流唐手なのです。

中段受け

核心を理解していれば技に技を含ませる事も出来るようになります。

例えば四方割の裏拳は中段受けと掛け手が含まれていますが、これを基本に他の形にも応用して見るのです。

セイサンの形には中段受けが山ほど出てきます。その中段受けにこれを含ませるだけで、同じ動作でもガラッと内容が変わってしまいます。中段受けからの逆突きよりも、中段受けからの裏拳からの掛け手、そこからの逆突きとなるわけです。

中段受けの言葉に縛られない事です。自分で中段受けだと決めてしまうとそこで停滞して終わって進まなくなってしまいます。全ての形の動作の名前を取っ払ってやってみるのも新しい発見があっていいかもしれません。

他にも中段受けは形の中にたくさん出てきます。それら全てにこれを含ませるだけで形がさらに深くなると思います。

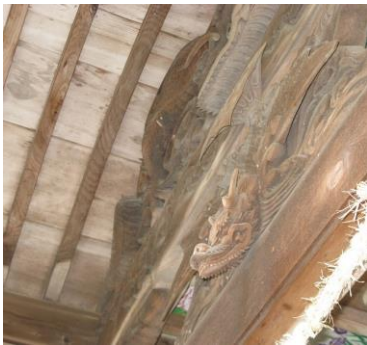
最近読んだ本の中で；

「数学は、正解を見つける能力を養う。美術は、自分なりの答えをつくる能力を養う。」
というのがありまして、古流唐手はどちらかというとな美術の艺术的な考え方の方だと思います。数学的な考え方だと形骸化してしまうでしょう。

技を実際に見てやってみて痛みを経験して、アウトプット方法で気づいたことや感じたことを書き出し、そして、またやってみて経験して思考する、それにより次にやるべきことが見えてくる。これの繰り返しこそが**力必達**だと思います。



【旅紀行・かかし祭り】天草市宮地岳では毎年春先からゴールデンウィークにかけて御祭りが開催されます。訪れる人を驚かす「かかし」の数は、なんと400体以上にものぼり、普段は静かな里山が賑やかな笑顔あふれる村に変身します。地域の田んぼや川などの地形を利用し村全体に表情豊かなかかしたちの世界が広がり、古き良き田舎の生活を伝えてくれます。(福田 脩)



【旅紀行・広住見神社（熊本市北区植木町）】唱歌の挿絵に出てくるような社の佇まいに心惹かれます。狛犬の表情は力強く、拝殿の十二支の天井絵や同破風上の植物画、彫刻も実に見事です。（福田 脩）

マンネリ

一定のやり方が繰り返されるだけで新鮮味が無いことを“mannerism”と言い、和製英語のマンネリとなります。

基本技の練習ではおおうにしてこのスタイルに陥りやすく、それはいつの間にかに既成概念あるいは固定観念となっていく。

私がそこから脱したのは基本動作の「受け手」からです。それは中段の受け動作が“この受け手は上中下の受けに変化していくのだよ……”と教えていることに気付き、それが“技の質的な変化を知る事

の重要性”となり他の技群へ伝搬していったのです。

物事を一方向（角度）からだけで見ていると…必然的にマンネリ化につながっていきます。

私が稽古指導をする時に注意するのが、そのマンネリ化です。もちろん同じ動作を何回も何回も……も反復して技（技法）を身につけていく練習の重要性を合わせ持ちながらです。

これからも稽古を続けていく上でのモットー（標語）である「手を変え、品を変え」をいろいろと考えそして工夫していきたいと思っています。（坂本）



佐伊津神社（佐伊津十五社宮）

熊本天草にはたくさんの十五社神社があります。十五社神社の名の起源と天草に十五社神社が広まったのには諸説あるそうです。その中で面白いのがこの説です。（福田 脩）

『「天草合戦誌」によると、十五社神社は古代天草の海人族が信仰していた龍宮が起源だという。



「龍宮さま → リュウグウさま → ジュクサさま → ジュウゴさま → 十五社」のような流れで十五社神社になったといわれる。それがいつしか「天照大神」や「阿蘇十二神」をふくむ大和朝廷文化圏の神々十五社を併せ祀ることになったという。』

和



古流唐手龍精空手道季刊誌

龍手/Ryushu

<http://www.ryusei-karate.com/>

忍